

るのは、主人公のドクターと呼ばれる異星人がコンパニオンと呼ばれる地球人の仲間とともに時空を自由に行き来して、旅をする道中で遭遇した、地球や他の惑星で起こる理不尽な外敵侵略、タイムパラドックスを防ぐために奔走するというものです。

<発表 要旨>

「中国映画のグローバル化」



周 燕さん
(博士前期課程2年次生 言語文化コース
東アジア地域、出身地・中国)

1905年、日本で撮影技術を学んだことのある北京豊台写真館のオーナー・任慶泰が制作した映画『定軍山』が中国映画の始まりとなります。それから約100年間、中国では、合わせて7,000本の映画が撮られました。中国の政治や経済が世界の政治や経済と一体化する度合いを強めるにつれ、中国映画もその渦中に巻き込まれ、世界にどんどん進出していきました。中国映画は、グローバル化の進行による多元的な価値観を取り入れると同時に、民族的な文化伝統をも維持して絶えず発展しました。

<発表 要旨>

「字幕の魅力～映画を“読む”～」



岩石 歩さん
(英米語学科3年次生)

日本人が洋画を見るにあたって、必要不可欠なのが字幕です。日本語字幕が初めて付けられたのは、1931年公開の「モロッコ」という映画でした。それまでの洋画は、音のないサイレント映画と活動弁士（語り手）による解説・セリフで構成されていました。これは話芸の文化が根付いていた日本で発展した独自のものですが、字幕の登場後、その数は激減しました。字幕を制作するにあたって、「1秒4文字ルール」や「流行語の使用禁止」など様々なルールがあります。それに加え、台詞の長さや文字数の計算や台詞のタイミングをコマ単位でパソコンに入力します。ただ翻訳するだけでなく沢山の過程を経て字幕が出来上がるのです。そんな字幕の魅力は、日本語であると考えています。英語だけでは理解できないニュアンスも、日本語独自の言い回しで表現することができるからです。字幕は単なる和訳ではなく、人物像を描き、緻密なニュアンスを伝え、監督の意図を表し、ストーリーを描くという大きな役割があるのです。

<発表 要旨>

「韓流の魅力：ドラマを中心に探る韓国文化とその魅力」



鄭 愉珍さん
(日本語学科4年次生、出身地・韓国)

韓流ドラマが日本で人気がある理由は、三つあります。一つ目に日本とは違う韓国文化への興味が挙げられます。二つ目は、ドラマのストーリーに見られる非現実と現実部分の境の厚さが挙げられます。韓国の映画、ドラマは日本のドラマと比べるとはるかに現実的です。三つ目は、日韓のドラマを制作する過程で視聴者の意見を反映するか、しないかも挙げられます。